

新いばらき新聞「県民論壇」

良識を政治に満たすことを 大森創造さんのこと

茨城県議会議員 海野 隆

元日本社会党参議院議員大森創造さんが昨年の11月14日に亡くなった。体調を崩されて入院してからほぼ40日余り、ひとつの時代の終わりの象徴だった。

93年10月頃、突然、大森創造さんから初めてのお電話をいただいた。その頃、私は、91年の那珂町長選挙に、議員から挑戦したものの見事に落選し、友人の産婦人科医院の事務長として一市民の立場で政治に関わっていたに過ぎなかった。細川護熙氏がたった一人で結成した日本新党に心を動かされながらも、当時所属していた社会民主連合が最後の飛躍をかけて挑戦した翌年の参議院選挙に比例区立候補要員として名簿登載され、結局社会民主連合は比例区での当選を果たせず94年に解散することになるのだが、激動の連立政治の幕開きの時代だった。

細川護熙氏の日本新党ブームは翌年の93年の総選挙まで吹き荒れ、夏の総選挙後自民党の一党支配が崩れ、日本新党や新生党、新党さきがけ、公明党、日本社会党などによる八党派による連立細川政権が樹立された頃であった。

大森創造さんのことは、名前こそ知っていたものの世代も異なり、また議員を引退してから長い時間が経っており、ほとんど予備知識を持たないまま、緊張して水戸駅南にある日本新党茨城の事務所があったノアビルに向かった。日本新党茨城は総選挙に旧茨城四区で候補者を擁立した。茨城4区は当時の自民党幹事長梶山静六氏の地元である。茨城4区では日本新党は善戦したが次点に止まり議席を獲得することはできなかった。その日本新党茨城の背後に大森創造さんがいることを知ったのは後日のことだった。

初めてお会いした大森さんは大変に迫力のある方だった。圧倒的な気というものを感じた。眼光是鋭く、話は単刀直入だった。用件は日本新党に入党し一緒に活動をしないかという誘いだった。日本の政治状況や茨城の政治改革の意義などほとんどの点で意見の一致を見た。当時私は社会民主連合という小政党の茨城県の事務局長を担っており、日本新党に入党することは無理だった。今後連携を強く取ることを約して失礼したが、それから亡くなるまでの大森さんの最晩年の6年間、深くお付き合いいただいた最初の出会いだった。

大森さんが細川護熙氏の叔父と上海の東亜同文書院で同窓だった関係で、細川護熙氏から直接電話があり旧茨城四区での候補者の擁立について要請を受けたことなど、日本新党に関わった経緯などについてお聞きした。大森さんは、県内の若い政治を志す方々との連携を取ることで、既成の政党や政治勢力とは離れて茨城県内の政治改革を構想していた。夢見ていたといっても良い。そのためまさに東奔西走、東に市民派の地方議員がいると聞けば東に走

り、西に若手で有望な政治を志す人がいると聞けば飛んでいくといった具合だった。その行動範囲は茨城県全域に及び、行動は直接的だった。

大森さんが、参議院議員を引退されたのは1972年であり、その後、党から請われて水戸市長選挙に立候補し善戦したが落選してからは、政治の第一線からは完全に姿を消していた。その消息について人の口端にのぼることはなかった。その大森さんが突然政治の表舞台に再登場し、しかも当時日本政治のブームとなっていた日本新党茨城を率いての登場であったから、政治に関わっていた方々も一般の方々も大いに戸惑い驚いたのだと思う。

大森さんの最初の印象では、圧倒されるような迫力を感じたが、何回かお会いしてお宅に伺ったりするたびに、大森さんがきわめてピュアな精神の持ち主であり、ユーモアもあつて博識で、とにかく話の面白い方であるということが分かってきた。顔をくしゃくしゃにしていたずらっぽく笑う大森さんの姿が、いまでも目に浮かぶ。人と会う時はいつも、他人の良識を信じるころから入って行った。他人の良識を信じるという姿勢は一貫しており、その期待が裏切られたときの落ち込みや怒りは、その分だけ激しかったように思う。

大森さんは93年に長女の敦子さんを失っている。大森さんのお宅で敦子さんのことを何度か伺ったことがある。「芸術的な方向に才能があつた」と語る大森さんは、敦子さんのことを本当にいとおしく思っていたことを隠さなかつた。敦子さんが病まれ、その後病を癒すた

めに大森さんが寄り添われて一緒に過ごした時期のことについて、大森さんは幸福だつたと語った。魂が交流したのだと思う。

連立政権が樹立され細川護熙氏が首相になつた後、佐川急便問題や福祉税などの問題で細川政権が倒れ、自社さ政権が成立し、日本新党が解党され新進党へと移行していく中で、大森さんは表舞台での政治活動の二度目の引退をされた。しかし、その後、政治活動を止めることはなかつた。特に若い政治家の人材育成に情熱を傾けられた。私をはじめ県内の多くの若い世代の政治家に影響を与え続けた。その後の大森さんの活動は、語録のひとつである「良識を政治に満たすこと」という目標を定めて、その実現に向けて突進していたという印象を受ける。一途なのである。こうと決めたら誰にも止められない。大森旋風に巻き込まれてしまうのである。大森さんの茨城の政治風土の改革の戦略はきわめて明解だつた。そしてそれは実現されるべきものだつた。しかし、実現が容易ではないことも確かだつた。現実の選挙や政治は「悪貨が良貨を駆逐する」ことが多いからである。

大森さんのお宅に大きな木がある。その木の下に庵がある。大森さんの警咳に触れた者達が定期的に集まって、茨城の政治を語る場をつくろうという構想があつた。名称は多分「創造塾」となるのだろうとの合意があつた。大変に楽しみにされていたと聞いていたが、皆それぞれに忙しく、なかなか実現に至らなかつた。

大森さんが突然体調を崩され、入院するちようど一週間前に私

の事務所に来ていただいた。その日大森さんは、私の友人の早朝の訪問を受けて、その足で大洗町の議会議員の家を訪ねて懇談され、帰りに私の所に寄ったのだ。私の所にお寄りいただいたのは、その日私はある人物と会うことになっており、まるで詐欺師のような相手の真実を見極めるために大森さんのお力をお借りしたのだった。自宅にお送りする車の中で「創造塾」の話をしながら、それが最後の別れとなってしまった。共和精糖事件の追及という面がセンサーショナルにマスコミに大きく取り上げられ「国会の爆弾男」という異名も持っていた。大森さんの参議院議員時代の質問一覧表というものが手元にある。政治家として国会議員としての業績について、これから少しずつまとめてみたいと思っている。